

シリーズ

# 『冬の兵士 良心の告発』

## を観る



『冬の兵士 良心の告発』上映会 資料

2009年6月21日

浅香人権文化センター（大阪市住吉区）

主催：リブ・イン・ピース 9 + 2 5



**ジョン・マイケル・ターナー**  
 Jon Michael Turner  
 証言時22歳  
 所属・海兵隊 任務・機関銃手  
 2006年3月～ファルージャ アブグレイブ  
 ラマディ



**ジェイソン・ウォッシュバーン**  
 Jason Washburn  
 証言時28歳  
 所属・海兵隊 任務・ライフル撃手  
 2003年3月19日～9月11日 ヒッラ  
 2004年3月27日～2005年2月6日 ナジャフ  
 2005年9月6日～2006年3月31日 ハディーサ



**ジェイソン・ハード**  
 Jason Hurd  
 証言時28歳  
 所属・テネシー州兵 任務・衛生兵  
 2004年11月～2005年11月 バグダッド



**J・ウエイン・レミュー**  
 Jason Wayne Lemieu  
 証言時25歳  
 所属・海兵隊 任務・歩兵  
 所属・海2003年1月～9月 カルバラ  
 2004年1月～9月 フサイバ  
 2005年9月～2006年3月 ラマディ



**カミロ・メヒア**  
 Camilo Mejia  
 証言時32歳  
 所属・フロリダ州兵 陸軍  
 2003年4月～10月 ラマディ  
 イラク再派兵を拒否し投獄された最初の兵士  
 (2004年3月21日～2005年2月15日獄中)  
 現在、反戦イラク帰還兵の会議長



**ケリー・ドーアティ**  
 Kelly Dougherty  
 所属・コロラド州兵 軍警察部隊  
 2003年3月～2004年2月  
 父がベトナム帰還兵。父に誘われ、04年7月平和のための帰還兵の会・VFPボストン総会に参加。彼女は他のイラク帰還兵と共に反戦イラク帰還兵の会・IVAWを設立。一時IVAW議長。

# Winter Soldier



**ジェフ・ミラード**  
 Geoffrey Millard  
 証言時27歳  
 所属・ニューヨーク州兵軍曹  
 任務・戦闘工兵  
 2004年10月～2005年10月



**リアム・マダン**  
 Liam Madden  
 証言時23歳  
 所属・海兵隊軍曹  
 任務・電気通信技師  
 2004年9月～2005年2月 ヒッラ



**マイケル・ルデューク**  
 Michael Leduc  
 証言時22歳  
 所属・海兵隊 任務・突撃兵  
 2004年6月～12月 アンバール州ハディーサ  
 ファルージャ



**カルロス・ハリス**  
 Carlos Harris  
 2003年3月～04年3月 インターネット設置  
 など後方支援部隊、輸送、警備などの任務。  
 2004年11月～2005年11月 バグダッド、  
 アンバール州西部（ファルージャ近郊）に駐  
 屯。友人が輸送任務中、路肩爆弾で死亡。

# Soldier

このリーフレットは、リブ・イン・ピース 9 + 25のホームページで連載した  
 [シリーズ]『冬の兵士 良心の告発』を観るをまとめたものです。

## 目次

### [シリーズ]『冬の兵士 良心の告発』を観る

(はじめに)「ウィンターソルジャーの証言を検証し分析するのはこれからの課題だ」

(その1)市民の無差別殺りく、敵の非人間化による殺人洗脳、帰還兵の精神疾患、軍隊の監獄化等を帰還兵の証言と映像で生々しく告発

(その2)「アルカーイダは、アメリカ人を怖がらせる亡霊のひとつだ」

(その3)「ファルージャの西、ユーフラテス川北の橋で、男は14歳未満でないと出さないと決めたので、男達を追い返しているところです」

(その4)「戦争はこの国の一つの世代をまるごと非人間化し、イラクをまるごと破壊した」

(その5)「人間は撃ちつくしたから、犬や猫や鶏など動くものは何でも撃った。」

「我々に食料を持ってきた女性を粉々にしたのです。」

「母親、父親、子供二人を殺し、男の子は4才、女の子は3才でした。」

(その6)偽装工作「爆弾を埋めるために使われるシャベルを持っていき、市民を間違っ

(その7)PTSDとTBIの深刻な被害 「怒りの発作が起きて、仕事が続かない  
・・・車にいるときに、路上の人を銃撃する幻覚を見る・・・毎日死ぬことばかり考えていた」

(その8)「私は、国旗を逆さまにしている。なぜならアメリカは今、国難に遭遇しているからだ、しかし、我々は、まだアメリカを愛している。」

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る  
「ウィンターソルジャーの証言を検証し分析するのはこれからの課題だ」

はじめに

このシリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観るは、『冬の兵士 良心の告発』の場面や証言、見た人からの感想などを元に、この映画が問題提起しているものをさまざまな角度から捉えようとするものです。

『冬の兵士』はジャーナリストの田保寿一さんが、イラク戦争の本質を検証するために、2008年3月にワシントンDCで行われたイラク帰還兵による証言集会・ウィンターソルジャーでの証言と独自に行った取材をもとに編集し、自らナレーションをおこなって作り上げたドキュメンタリー映画です。映画は3つの章に分かれています。第一章・戦闘モラルの崩壊、第二章・銃口の先に見たもの、最終章・軍隊という監獄。この公聴会での帰還兵らの証言の映像に、田保さんがイラクで撮影した映像を加えながら、1時間15分の短編の映画に仕上げられています。このわずかな時間にイラク戦争の全体が凝縮されているといってもいいでしょう。公聴会だけでも50時間という膨大な資料映像をわずか1時間強に凝縮したのは、出来る限り容易に見られるようにし、米国で起こっている変化を多くの人たちに伝えたいという思いからだと思います。田保さんは、イラク帰還兵が戦争のただ中に戦争犯罪を告発し始めたことに大きな局面の変化を感じたと言います。実際、米国ではオバマ大統領が大統領に就任し、イラクからの撤退を表明せざるを得なくなりました。しかしそれは極めて欺瞞的なものです。この映画で表現されている戦争の苦しみはイラク、アフガンで今も続き今後も続いていきます。『冬の兵士 良心の告発』はますます意義を高めていると思います。

登場するどの兵士も誠実で、真剣な告発を行っており、すべての証言と映像が強い印象を与えます。そして問題は多岐にわたっています。田保さんは、DVDの冊子の中で次のように語っています。「彼らの証言を正しく理解することは、困難で作業がなかなか進まなかった」「ウィンターソルジャーの証言を検証し分析するのはこれからの課題だ。私も、その意味の解読に参加したいと思う」。私たちは、この言葉を、戦争での人殺しを強制されその経験と記憶にさいなまれている人々の苦しみを、その渦中にない者たちが簡単には理解することはできないという意味だと捉えました。しかしその苦しみを、またそれを告発する意義を人々が理解しようとし、諸個人の苦しみにとどまらず時代の苦しみと感じ始めた時に、事態は大きく転換していくのではないかとも思いました。私たちもまたささやかながら”解読に参加”していきたいと思います。

米国のイラク、アフガニスタン侵略戦争に加担しているこの日本で、多くの人たちに

この映画が観られ、議論が広がっていくことを願います。シリーズ「『冬の兵士 良心の告発』を観る」がその一助となればと思います。観られた方からの投稿も大歓迎です。

2009年3月7日  
リブ・イン・ピース 9+25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る (その1)  
市民の無差別殺りく、敵の非人間化による殺人洗脳、帰還兵の精神疾患、軍隊の監獄化等を帰還兵の証言と映像で生々しく告発

アメリカ合衆国の公文書館。イラク戦争開戦5年目の3月19日、イラクから帰還した兵士達が、デモ行進してやってきます。「戦争をやめよう、今すぐに!」「アメリカよ、目を覚ませ!」と。

デモをしているのは反戦イラク帰還兵の会のメンバーです。彼等はこのデモを行う前、2008年3月13日~16日まで、厳しい冬の時代に戦う兵士という意味のウィンターソルジャーと名づけた集会を開催し、戦争の体験・イラク占領の本当の姿を証言しました。

### ワシントンDC郊外の全米労働大学での証言集会

集会の最初は、戦闘モラルの崩壊についての証言が続きます。アダム・コケシュはファルージャを包囲した時、交戦規定は下着を変えるよりも頻繁に変わったといいます。別の人は「振り向くたびに交戦規定がかわった」「交戦規定は冗談か、方便のよう」等々と訴えました。

彼等はモラルがなくなった、恥を知るべきだといいます。彼等はこみ上げてくる感情に中断されそうになりながらも、力をこめて、戦場の真実の姿を証言しました。交戦規定の問題では15人の帰還兵が証言し、イラク市民を無差別に殺害している事実を公表しました。

### 証言集会・ウィンターソルジャー3日目

「差別と戦争、敵を非人間化する」というテーマで証言が行われました。ジェフ・ミラードは「自分達以外の人間を「ハッジ」=軽蔑すべきものと呼んだ、こんな人種差別と非人間化が、戦争の最高司令官にはじまり、最下層の兵士まで浸透していると。別の人は「戦争を正当化するために、相手国の市民を人間でないものと思わなければならない、今、アメリカでは「テロリスト」が人間でないものだ、米軍は市民を殺している、私には「テロリスト」と軍隊の違いがわからないと。カルロス・ハリスはい

います、米軍はイラクの市民と戦っていると。

### 証言集会・ウィンターソルジャー最終日

軍隊という監獄、軍の瓦解というテーマでの証言が行われました。ゴールド・スミスはサドルシティに派兵されていました。占領に反対する運動が最も激しい地区のひとつです。イラクから帰国後、酒を飲み続けました。大学に行くことだけが希望でしたが、増派要員確保政策で拘束されました。彼は絶望から自殺をはかり、処分として大学給付金を受けられなくなりました。彼は今ピザの配達員をしてなんとか食いつないでいます。

再び、反戦イラク帰還兵の会のメンバーのデモ行進の場面に移ります。ホワイトハウス前でデモ行進の歌「反戦イラク帰還兵の会が、何でデモしているかわかるかい。我々の兵隊を帰国させるためだ。血も油ももうたくさんだ。」

反戦イラク帰還兵の会は、占領軍のイラクからの即時撤退、イラクへの賠償、帰還兵への福祉の実現をめざし闘いを広げていこうとしています。

2009年3月7日

リブ・イン・ピース 9 + 25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その2)  
「アルカーイダは、アメリカ人を怖がらせる亡霊のひとつだ」

そもそも田保寿一さんがイラク帰還兵の取材を始めたきっかけは、「アルカイダ」と呼ばれるものの正体がわからないので、米軍の帰還兵たちが、その情報を持ってないかと思ひ連絡をとり始めたことだといひます。このいきさつがまた実に興味深いものです。帰還兵と連絡がとれると「米軍はテロリストとどのように戦ったか？」などと訊いてみたといひます。だが話がかみ合わない。皆が口々に「テロリスト」という言葉を使うのを嫌い、「テロリスト」はいなかった、「武装勢力」はいたけれど・・・などとちぐはぐなことを言いはじめたのです。これはどういうことでしょうか。

映画の第二章に以下のような場面があります。

田保「ファルージャとアルカーイダの関係を言う人がいますが？」

コケシュ「政策を支持させるためアメリカ市民を情報操作している、アルカーイダは、アメリカ人を怖がらせる亡霊のひとつだ」

リアム・マダン「ある人がテロリストと呼ぶ人は別の人にとって自由の戦士だ。戦争を正当化するため戦争の相手側の市民を人間的でないものと思わなければならない。・

・」

実に現場の米兵自身が、「テロリストはいない」「アルカイダは亡霊だ」「自由の戦士だ」と認識していたのです。

さらにこんな問答もあります。

田保「武装勢力とは誰のことだと思えますか？」

コケシュ「武装勢力とは、米軍の占領にうんざりしている人たちです、私は 17 歳で海兵隊に入った、もし自分が 17 歳でイラク人だったら、占領軍を自分の国から追い払うため武器を手に取らないかもしれないが、自分のとるべき立場はわかる、12 歳から 17 歳で、男としてまともに育っていれば、自分の国が外国に占領されて、いい気持ちではられない。」

「テロリスト」は戦争をするために米軍が作り上げた亡霊だった。では米軍が闘っている「対テロ戦争」、イラク戦争とはどんなものなのか。それがこの映画で語られている内容です。

ウィンターソルジャー公聴会 3 日目は「差別と戦争、敵を非人間化する」というテーマで証言が行われ、自分達以外の人間を「ハッジ」= 軽蔑すべきものと呼び、人種差別と、非人間化が、戦争の最高司令官にはじまり、最下層の兵士まで浸透しているが無差別虐殺を可能にすると証言します。「戦争を正当化するために、相手国の市民を人間でないものと思わなければならない」と。

これは、単にイラクの前線で闘う米兵たちだけの問題ではないはずです。「アルカイダ」「テロリスト」「悪の枢軸」「イスラム原理主義組織タリバン」「イスラム原理主義組織ハマス」など、攻撃しようとする相手を自分たちと異質な者、いや人間ではないものと思わせるためにありとあらゆる手段が取られています。それは、米欧日などの政権の責任だけでなく、マス・メディアの責任でもあります。

2009年3月8日

リブ・イン・ピース 9 + 25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その3)  
「ファルージャの西、ユーフラテス川北の橋で、男は14歳未満でないと出さないと決めたので、男達を追い返しているところです」

この場面は、全体の中でも特にイラク戦争の残虐性を語る重要な場面だと思います。死体の写真や攻撃の写真があるわけではなく、橋の上に男たちが数人立っている写真です。しかし、胸が苦しくなるほど重い気分させられます。

これは、ファルージャ包囲についての証言です。生々しい殺りくの証言ではありませんが、ファルージャで何が起こったかを想像させてあまりある内容です。

アダム・コケシュは言います、「ファルージャを包囲したとき、我々は女性と子供を出そうとした、立派なことをしているつもりだった。ファルージャの西、ユーフラテス川北の橋で、男は14歳未満でないと出さないと決めたので、男達を追い返しているところです、寛大なことをしているつもりだったが、私はひどい意思決定を家族に強制したと思うようになった。」



そして彼は、「夜間外出禁止令を出した時、夜にはあらゆるものを撃つことが許された」といいます。

「女と14歳未満の男だけは町から出す、14歳以上の男は町へ残れ」 - - このような命令は何を意味するのでしょうか。町を包囲し、中にいる者はすべて「テロリスト」として皆殺しにするという作戦しかありえません。そして現にそういうことが起こりました。

コケシュは「女性と子供を外に出そうとしたが、多くは出なかった。」と付け加えました。女たちは、みすみす虐殺させるために男たちを残していくことなど出来ず、多くが一緒に残ったのです。これは現場にいたものだけが出来る貴重な証言です。

2004年4月と11月ファルージャの大虐殺。ファルージャ市民を袋のネズミにして虐殺させるために、検問所で男たちを追い返す任務に就いた兵士たちの苦悩が描かれています。

2009年3月8日

リブ・イン・ピース 9 + 25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その4)

**「戦争はこの国の一つの世代をまるごと非人間化し、イラクをまるごと破壊した」**

この発言は、『冬の兵士 - - 良心の告発』のチラシやポスターなどにも引用されている、とても重要な言葉です。米国にとってイラク戦争が将来にわたって持つことになる意味的的確にあらわしています。反戦イラク帰還兵の会(IVAW)のカミロ・メヒア議長が公聴会2日目に行った発言です。

「戦争は人間性を奪うのです、戦争はこの国の一つの世代をまるごと非人間化し、イラクをまるごと破壊した、我々の人間性を取り戻すため、イラクから軍隊の無条件即時撤退を要求する、すべての帰還兵に福利厚生を要求し、イラクの人々が自ら国を再建す



るため補償することを要求する」

最近TUPの翻訳で、この発言部分の全訳が公開されました。彼は市民の殺害や捕虜の虐待といった戦争犯罪を告白した上で以下のように述べました。

「亡くなったイラク人は100万人を超えます。500万人以上が難民となっています。米兵の死者は4千人近くに達し、戦闘によるもの、戦闘以外の事由によるものを合わせて6万人近くの負傷者がイラク戦争から帰還してきています。しかも、それだけではありません。この世代が戦場から帰還するときには、PTSD（心的外傷後ストレス障害）やその他の心理的、情緒的な後遺症をかかえて帰ってくるのです。つまり、私の話で言いたかったのは、」と言い、上の引用部分が続きます。

TUP速報816号 イラク・アフガニスタン帰還兵の証言 No.10  
冬の兵士 カミロ・メヒア 人種差別と戦争：敵を非人間化する  
(4) 訳 向井真澄 / TUP冬の兵士プロジェクト



まず、イラク人の死者100万人という、アメリカのジョーンズ・ホプキンス大学とイラクのムスタンシリア大学による共同調査の結果をリアルな数字として受け入れていることが注目されます。それは、疫学的手法に基づく科学的に確立された測定法によって行われた集落抽出調査によっており、メディア報道などをもとにイラクボディカウントなどが発表している「控えめな」9～10万人という犠牲者数よりも、現場の米兵の感覚として100万人がより近いことが分かるからです。

「2003年イラク侵略後の死亡率：横断的集落抽出調査」の紹介 65万人を超えるイラク人が米軍、多国籍軍の侵攻の犠牲に（署名事務局）

「対テロ戦争」への加担に反対し、イラク・インド洋からの自衛隊撤退を求めるシリーズ（その5）イラク戦争の民間人犠牲者が100万人を超える！（署名事務局）

現在、米兵死者はイラクで4258人（3/14現在）、アフガニスタンをあわせれば4920人、派兵経験者は180万人にも達します。これらは単に個々の米兵の問題にとどまるものではありません。派兵年齢はおおむね20歳前後から28歳、それは同時に未来を担っていく若者の世代でもあります。彼らが、軍のリクルーター（勧誘員）たちにだまされ、あるいは奨学金のために、家計や家族の健康保険のために無理矢理侵略戦争の現場にたたき入れられ、殺人を強要され、人間性を破壊されて戻ってきます。その20代の一世代をまるまる破壊してしまった影響はどうなるのか。配偶者へのDV、子どもへの虐待なども考えれば、これから未来社会を作っていくべき若者達やその家族が、100万、200万の単位で精神疾患や身体障害による就業不能、暴力、家庭崩壊、

ホームレス、自殺などによって破滅していくことを意味します。

私たちはスティグリッツ博士の試算などで、イラク・アフガン戦費が今後トータルで3兆～3兆5千億ドル(300兆円～350兆円)に登り、長期にわたってアメリカ社会に大きな打撃を与えていくことを指摘し警鐘を鳴らしてきました。その経済的負担には直接戦費だけでなく、帰還兵の障害者年金や生活補償、労働力損失による経済的影響なども含まれていました。

日本も無縁ではない。侵略国家の近未来像 = 米国社会にのしかかるイラク戦争長期化と侵略国家の“暗い未来”(署名事務局)

「対テロ戦争」への加担に反対し、イラク・インド洋からの自衛隊撤退を求めるシリーズ(その10) 膨らむイラク・アフガン戦争の巨額戦費。サブプライム危機、景気後退への突入の中でますます人民生活を圧迫(署名事務局)

Cost of Iraq War and Nation Building (Zfacts)

カミロ・メヒア議長はこの発言に続けて、反戦イラク帰還兵の会として3つの要求を行います。そこには、大義のない戦争を行い「イラクをまるごと破壊」してしまった米国がしなければならない事が、的確に表現されています。

第一にイラクから軍隊の無条件即時撤退です。これは、戦闘部隊限定でも、15ヶ月以内でも18ヶ月以内でもなく、即時無条件の撤退です。派兵期間を延長して兵員を軍に縛り付けるストップロスや米国の沿岸警備をするはずの州兵を無理矢理イラクに派遣する違法行為、戦場には派遣しないなどウソをついて入隊させ即座にイラク行きを命じるなど一切の不法・違法行為を今すぐ終わらせるべきことを意味します。オバマの撤退論は、治安の安定 = イラクが親米国家として依然米国の支配下にとどまることが暗黙の前提になっています。それに対して、反戦イラク帰還兵の会は、米軍の駐留を「イラク占領」と捉え、無条件即時撤退を要求しているのです。

第二に、全ての帰還兵に対するケアの要求です。従軍兵士の社会復帰の困難、大量に生まれるPTSDと精神疾患、薬物汚染・アルコール中毒の蔓延、社会的適応能力の喪失、妻や子どもへの暴力、家族崩壊、自殺と犯罪、職場復帰の困難、失業とホームレス化、所得減と生活苦、劣化ウランなどによる慢性疾患が問題にされているものの、十分なケアが行き渡っていません。

第三に、イラクの国と被害者に対する国家賠償要求です。これは極めて重要な要求です。大量破壊兵器の保有などというでっち上げの開戦理由でイラクを破壊したアメリカの戦争責任の思想が前提になっています。これらは、民主党系リベラルのスティグリッツ博士の論文にも含まれていない観点です。アメリカが応じるべき国家賠償の額を計算に入れた場合、先ほどの3兆ドルを超えるコストはどれくらいに膨れ上がるのかは想像もつきません。反戦イラク帰還兵の会が、米兵のケアだけでなく、イラクの犠牲者への補償と賠償の要求を全面に掲げているのは特筆すべきです。

最後に、現在 IVAW のトップページに掲載されている「オバマに面会し、イラクから

の完全撤退を要求したい」という主張を紹介したいと思います。IVAW はオバマ政権の発足にあたり、書簡を送り面会を求めています。

IVAW Wants to See Obama Call for a Complete Withdrawal from Iraq (IVAW)

この主張では、

- ( 1 ) オバマの撤退計画なるものは、18ヶ月にわたって徐々に戦闘部隊を撤退させるというもので2011年まで3万5千~5万の軍隊は残り続ける欺瞞的なものである。
- ( 2 ) それはイラクをまる3年間にわたって軍事占領し続け、米兵とイラクの人々の命を奪い続けるものである。
- ( 3 ) 戦闘部隊が撤退し支援部隊が残るだけだとしても「対テロ戦争」の継続であることに違いない。
- ( 4 ) オバマは、15万人の民間戦闘員と傭兵(いわゆる“外注化された戦争”)の撤退スケジュールも示しておらず、恒久軍事基地を放棄するとも言っていない。
- ( 5 ) アフガニスタンへの17000人の増派は許されない。
- ( 6 ) そして、イラクの石油資源などに対する野望を捨て、軍事基地の閉鎖を含め、全ての占領軍が即時無条件に撤退することを要求する。

などが含まれています。

2009年3月15日

リブ・イン・ピース 9+25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その5)

「人間は撃ちつくしたから、犬や猫や鶏など動くものは何でも撃った。」

「我々に食料を持ってきた女性を粉々にしたのです。」

「母親、父親、子供二人を殺し、男の子は4才、女の子は3才でした。」

第一章は「戦闘モラルの崩壊」と題され、交戦規定を無視して行われる無差別殺りくが主な内容です。すさまじい、またつらい証言が続きます。ここでは、第一章を中心に重要な証言を紹介します。田保さんは3/22の講演で、私たちも紹介したNHK「戦場 心の傷」にふれ、番組はPTSDを問題にしているが、交戦規定が守られているかのような描き方がされている、それでは決定的に不十分だと指摘しました。戦闘中に交戦規定がめまぐるしく変わることは、一体誰が敵で、誰と闘っているのかを分からなくし、米兵の人間性を破壊していく大きな要因の一つではないかと考えられます。是非「良心の告発」を聞いてください。

アダム・コケシュ「ファルージャを包囲したとき、交戦規定は下着を変えるよりも頻りに変わった、最初は、交戦規定を守ることを求められたが、怪しいものは射殺することになる。双眼鏡や携帯電話をもつもの、ついには誰でも攻撃対象となった、現地に着いてから数日たつてある事件が起きた。

検問所で銃撃行動があった、最初の写真ををお願いします、これは検問所に近づいた車です、怪しい車が高速で来たといわれ、大口径の機関銃で撃ちまくった。減速しないものはすべて敵の戦闘員だとみなした、銃弾はバンパーからエンジンを破壊、このイラク人の胸を撃ちぬき座席まで破壊した。車のそばで撮影した私の記念写真です、居合わせた海兵隊員全員が、かわるがわる写真を撮ったのです」



(3/22の講演で、IED(即席爆発装置)は、2003年には導火線を伝って爆破させる形態が主流だったが、2004年になると、携帯電話で遠隔操作をして爆破させる形態にかわったと説明しました。したがって、携帯電話を持つ者はすべて、IEDを起爆させる「テロリスト」とみなされるようになったのです。)

ジェyson・ウオッシュバーン「ある女性が通りかかり、大きな袋を持っていた、こちらに向かってくるように見えたので、私たちは、MK19銃をぶっ放した、粉塵が収まると、その袋には食料品がいっぱい詰まっていただけだと分った、我々に食料を持ってきた女性を粉々にしたのです。」



カミロ・メヒア「息子と車にいた父親の首を機関銃で打ち落としました、首の無い死体のそばに人が立っていたが、その表情やどんな人だったかが思い出せません」

J・ウエイン・レミュー「無差別射撃をした兵士は、司令官が野菜を担いで歩いていた老婦人を射殺したのを見たことがありました、彼はその女を撃つと命じられたが断つたので、司令官が撃った、危険の無い車を彼が撃つたのは、司令官にお手本にしただけでした

マイク・ロビンソン「イラク人が畑を見ながら歩いているのを発見した、50才くらいの男で、背中に機関銃を背負っていた、彼は草むらに何かを感じ、我々の物音が聞こえたのだろう、銃に手を伸ばした、怖かったのだろう、交戦命令が下り、私は彼に向かって5発撃った、他の部隊も銃撃、彼は虫の息で、トラックに乗せると亡くなった、彼は怖がっただけで悪いことはしなかった、私だって犯罪を犯したわけではない、彼は撃と

うとしたし、私は命令された、このことで苦しんでいる、普通の市民を殺したのだから」

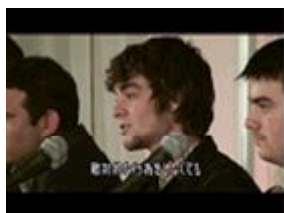
マイク・ロビンソン「心的外傷後ストレス障害はとても辛い、怒りの発作、うつ病、自殺を繰り返す、治療はほとんど不可能だ」

ジェイソン・ウオッシュバーン「兵士を募集する時、大学奨学金が貰える、職業訓練になり、各種給付金もある、家が持てて友人ができると言うが、イラク市民を虐待し、ひどく傷つけるという事実は言わない、現実には足を負傷する場合もあり、ホームレスになる人までがいる」

ジェフ・ミラード「スピードを出して来る車があり、機関銃手が脅威と判断し、50口径の銃弾を200発撃ちました、母親、父親、子供二人を殺し、男の子は4才、女の子は3才でした。夕方、将軍に対する報告会で、担当官がこの件を説明しました、その時、司令官のロシェル大佐が、部下の方を向いて、ハッジの馬鹿が運転を知っていたら、こんなクソみたいなことは起きなかった、と言った、周りは将校や下士官たちばかりで、私が一番下の階級でした、」



マイケル・リュデューク「海兵隊の諸君 武器を持つ人間がいたらどうしますか？誰かが声を上げた。銃を撃つ？違う、発砲し威圧することと射殺することは別だ。もう一度質問する。武器を持つ人間を見たら？殺す。双眼鏡を持つ人は？殺す。携帯電話を持つ人は？殺す。何も持たず、敵対行為が無くても、走っている人、逃げる人は何か画策しているとみなし、殺せ。白旗を掲げ命令に従ったとしても、畏とみなし殺せ。」



「ファルージャで僕たちは、その交戦規定に従い最初の三日間特に激しい戦闘が続いた。ブルドーザーと戦車を使って家屋を一つ一つひき潰し、瓦礫の上を歩いた。戦闘が始まって数日後に町は静かになった。僕たちは家屋の中に隠れた。数時間から一日二日も隠れたので退屈し痲痺を起こし、やっちまおうぜと、人間は撃ちつくしたから、犬や猫や鶏など動くものは何でも撃った。道に放置されている死体に名前をつけている隊員がいた。腐乱のランディ、胴体トニー、道に横たわる死体の頭を標的に銃の照準を調整する隊員もいた。狙いをつけて撃ち、左にそれるなら照準を調整してまた撃った。街の下水システムが爆弾で破壊され下水が道路にあふれ出ていた。その下水に死体がいっぱい溜まり、恐ろしい光景だった。前日何人かを射殺し、残りの人たちを拘束していた。その中に夫を殺された女性がいて、彼女の叔父か父親は目が見えなかった。僕たちは二人を家まで送り返すことになったが、二人は遅れてついてきて足手まといだった。途中まで来たところで二人を下水が溢れた道に置き去りにした。」

マイク・ロビンソン「バラド基地の正面入り口で警備をしていた時です、幼い少女が門に向かって歩いてきた、7歳の少女です、通訳が、止まれ、とイラクの言葉でいった、少女は止まらない、どうしたら良いのか？「止まれ」と言って止まらない子供は、射殺するしかないのでしょうか？命令が下り、彼らは7歳の少女を射殺した、調べると彼女の胸に爆弾がつけられていて、服で隠されていた。お父さんが娘に自殺攻撃をさせた。5人の兵隊がそこにいた。お父さんが娘の命よりも米兵の死を望んだ…。射殺してしまった…。」

2009年3月24日

リブ・イン・ピース 9+25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その6)  
**偽装工作「爆弾を埋めるために使われるシャベルを持っていき、市民を間違っ**  
**て射殺した時、それを死体の上に置けば、武装勢力**  
**だったと言える」**

これは、海兵隊員ジェイソン・ウオッシュバーンの証言です。彼は実に4年間のうちにイラクに3度も派遣されました。2003年はヒッラ、04年から05年にかけてはナジャフ、そして05年から06年にはハディーサに駐留していました。偽装工作については当時より疑われていましたが、明確な形で暴露されたのは限られており、実際に偽装工作を行った兵士の証言はきわめて重要です。米軍に対するイラク人の抵抗闘争がますます激化し、とりわけ路傍爆弾に米軍が悩まされるようになるにつれ、市民を容赦なく撃ち殺していった様子が伝わってきます。そして罪もない市民を撃ち殺した場合の偽装工作を米軍が組織的に行っていたことも明らかになります。

イラク：ハディーサの市民無差別虐殺（署名事務局）

署名事務局が2006年6月に紹介したこの記事では、市民の無差別殺りくを撮ったビデオが決定的証拠となりました。ジェイソン・ウオッシュバーンもこの時ちょうどハディーサにいました。

以下やや長めに TUP 冬の兵士プロジェクトチームの翻訳より引用します。彼は、罪のない市民に対して「めちゃくちゃに」やって、タクシーの運転手などを無差別に殺害した事実などを告白した後に以下のように締めくくっています。

ジェイソン・ウオッシュバーン「そのほかにも、ほとんど暗黙の了解のもとで勧められていたことがあります。証拠として残していくための武器を持参することです。3度目の派遣時にはシャベルを持参することになりました。つまり、武器かシャベルを常に持参していれば、うっかりと市民を撃ち殺してしまった場合に、ただその武器を死体の上に放り投げておくだけで、彼らを反乱分子のように見せかけることができるからです。



もしくは、私の友人たちがここで証言したように、3度目の派遣時には、もしイラク人がシャベルを持っていたら、または重そうなバッグを持っていたら、もしどこかを掘っていたら、特にそれが道路のそばだったら、彼らを撃っていいと教えられました。ですから、実際にこのような道具や武器を車に積んで運んでいて、うっかりと罪もない市民を撃ち殺してしまった時には、彼らの死体の上に放り投げておいて、こう言えるのです。「なーに、あいつは掘っていたんだ。交戦規則の範囲内さ」。これは、ひろく勧められていたことですが、陰でこっそりとだけでした。確かにおおびらに命じるようなことではありません。しかし、そうです、とても一般的に行われていたのです。」

(イラク・アフガニスタン帰還兵の証言(3) 交戦規則(3) ジェイソン・ウォッシュバーン 翻訳 福永克紀/TUP 冬の兵士プロジェクトチーム)

この偽装工作は、ドロップ・ウェポン (Drop weapon) という広く行われているやり方があることが「冬の兵士 良心の告発」のホームページで紹介されています。

Soldiers Discuss Using "Drop Weapons" To Cover Up Killing Innocent Iraqi Civilians

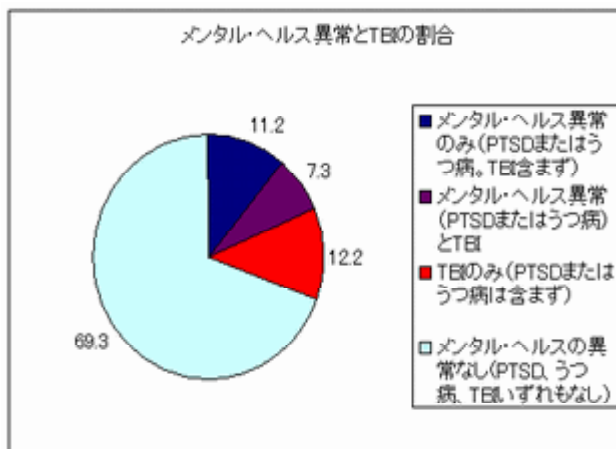
2009年3月31日

リブ・イン・ピース 9 + 25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その7)

PTSDとTBIの深刻な被害 「怒りの発作が起きて、仕事が続かない・・・車にいるときに、路上の人を銃撃する幻覚を見る・・・毎日死ぬことばかり考えていた」

これはマイク・ロビンソンの証言です。彼の証言は、多くの冬の兵士たちの証言の中でも異彩を放っています。屈強でいかつい風貌のロビンソンが、自らが犯した市民の殺害に悩み、何かにおびえ、涙を流す様子は、帰還兵を襲う PTSD (心的外傷後ストレス障害) の深刻さを見せつけます。彼は、怒りの発作、うつ病、アルコール中毒、妻への暴力、離婚、失職、ホームレス、人を銃撃する幻覚、戦場へのフラッシュバック、自殺未遂等々帰還兵たちを襲う深刻な経験をします。(その5)で紹介した、爆弾を胸に巻いたイラク人少女の射殺を証言したのもマイク・ロビンソンです。彼を救ったのは、女友達が連れてきた3歳の女の子でした。



マイク・ロビンソン「2003年6月20日、強制捜査の任務につき、機関銃を持ってビルの中で仲間を援護している時、戦闘ヘリコプターから不審者発見の知らせを受け、階段を下りているときに、IED = 手製爆弾が仕掛けてあり、足を吹き飛ばされ帰国することになった、帰国して市民生活を再開したが、怒りの発作がおきて、妻とは殴り合いの喧嘩をして、数回逮捕されそうになり、離婚した、職も失った、怒りの発作が起きて、仕事が続かない、家も失った、妻が出て行き家賃が払えなかった、友人を回り、路上やどこにでも寝た」

ジェイソン「それは辛い」

マイク「車にいるときに、路上の人を銃撃する幻覚を見る」

ジェイソン「駐車場で？」

マイク「銃撃し、自分にだけに爆弾の音が聞こえる、これは何だろうね？あたりは血の海で血しぶきがかかる、

毎日死ぬことばかり考えていた、頭はどう自殺しようかという考えでいっぱいだった、去年の1月19日、私の誕生日、一人ぼっちだったから、酒場で飲んで酔っ払い、狂ったようなスピードでジープを走らせ、タイヤが外れてしまった、警官が来なかったので、銃で頭を吹き飛ばそうと思いながら歩いていると、女友達のエリザベスから電話があり、励ましてくれたので、自殺しないですんだ。それから3才の娘と会い、エリザベスの娘だが、彼女が私の生きる理由になった。サラ、来てくれない？

サラは、3才だが、この子がいるから生きることができた。

この子がいなければとっくに死んでいた。」

ジェイソン「私の場合、うつ病がひどくて、ガールフレンドがとても心配したがどうしようもなかった」

マイク「心的外傷後ストレス障害はとても辛い、怒りの発作、うつ病、自殺を繰り返す、治療はほとんど不可能だ」

ジェイソン「兵士を募集する時、大学奨学金が貰える、職業訓練になり、各種給付金もある、家が持てて友人ができると言うが、イラク市民を虐待し、ひどく傷つけるという事実は言わない、現実には足を負傷する場合もあり、ホームレスになる人までがいる」

冬の兵士 良心の告発 シナリオ(リブ・イン・ピース 9+25)

オバマ大統領は、帰還兵の医療給付対象者を2013年までに50万人増やす方針を明らかにしています。PTSDやTBI(外傷性脳損傷)の患者への医療給付・ケアが決定的に弱かったことを認め、今後5年間で250億ドル(約2兆5000億円)増額させる方針を示したのです。帰還兵問題がもはや無視することが出来ないところまで極まってきたことを示しています。

2008年4月発表「戦争による目に見えない傷」(ランド研究所)によれば、帰還兵のうち30万人がPTSD、32万人がTBIを発症している。 [リブ・イン・ピース 9+25]



学習会パンフレット]戦争と人間性とは相容れない より

T B Iの問題は「冬の兵士」でも直接は触れられておらず、3月22日の講演会で田保寿一さんがイラク戦争の重要な特徴として補足しました。T B Iについては毎日新聞が2月、情報公開請求で米国防省から引き出した内部資料をもとに詳しく紹介しています。爆発の衝撃で脳の組織が破壊されるというT B Iは外からは見えないためこれまで見逃され、P T S Dなどと混同されてきたといえます。今年2月米国防総省は開戦後はじめて、T B Iを発症している兵士が1～2割(18万～36万人)に上るとの推計を明らかにしました。これまでは医療給付の統計から2万人程度とされていたのですが、その十倍以上に登ることが明らかになったのです。T B Iは、爆発で飛ばされた金属片を受けるなど頭部の直接的な傷によって発症するタイプのほか、頭部に外傷がなくても爆風により発症するタイプがあります。爆風により発症するT B Iはイラク戦争特有とされ、イラク派遣経験者の実に6人に1人にのぼるとみられています。イラク・アフガンへの派兵が数回に及ぶようになってきていることで、T B I患者が急増しています。

オバマ大統領は「アフガン新戦略」として、17000人の増派に加え4000人をさらに増派する方針を打ち出しました。掃討作戦を強化しながら、タリバンの一部を政権に抱き込むという「新戦略」です。しかし、反戦イラク帰還兵の会などは、イラクからの不十分な撤退とあわせて、罪のない市民と米兵を殺し続けるものだと厳しく批判しています。ランド研究所は平和研究所と共に、「戦略のない増派はほとんどい意味をなさない」と批判する報告書を出しました。メディアは「アフガンのベトナム化」を懸念する記事を頻繁に流すようになりました。帰還兵への医療給付を増やししながら「テロとの闘い」はあくまでも継続するというオバマ政権の政策は全く欺瞞的といわなければなりません。

2009年4月3日

リブ・イン・ピース 9+25

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る(その8)

**「私は、国旗を逆さまにしている。なぜならアメリカは今、国難に遭遇しているからだ、しかし、我々は、まだアメリカを愛している。」**

「我々は、まだアメリカを愛している」はアダム・コケシュの言葉で、「愛の力が力への愛に勝った時、平和が訪れる」という腕の入れ墨を映し出す場面とともに映画は幕を閉じます。私は、日本や米国の「愛国心」には拒否の気持ちが強く、はじめ映画を観たときはこの場面にある違和感がありました。それにもかかわらず、彼等を支え、鼓舞している「愛国心」が気になってしかたありませんでした。

このことについて、制作者の田保寿一さんは3月22日の講演会で、以下のように語りました。

「ここに登場するのは、9・11以降に兵士になった人たちです。反戦イラク帰還兵の会の人たちは、アメリカ社会からずっと無視されてきました。日本では、ウィンター・ソルジャーと言えびんと来ません。しかし、アメリカ人ならすぐにわかります。アメリカという国はイギリスの植民地でした。アメリカの人たちは独立戦争に立ち上がります。夏に始まった戦争はやがて冬になります。イギリス軍は強い。義勇軍達は負けそうになった。寒い冬の中で、もうやめようという声が出てくる。そのときひとつの檄文が飛びました。夏に闘う兵士は本当の兵士ではない、冬闘う兵士が本当の愛国者なんだ、と。それから「冬の兵士」は本当の愛国者をさすことになりました。これは、アメリカの愛国者とは何かという映画です。」

現在の米国では、特に9・11以降愛国法などが成立し、ブッシュの政策を公然と批判することが困難な状況に陥り、イラクやアフガニスタンで戦争をすることが愛国者の行為であると煽られてきました。しかし、彼らは米国の間違った国策を変えるために、真実を明らかにする自分たちこそが真の愛国者＝「冬の兵士」であるという誇りを持ってこの証言活動をおこなうようになったそうです。

私は「冬の兵士 良心の告発」をみて、帰還兵達が、政府の攻撃や政府の味方をするマスコミに抗し、イラク戦争・占領の本当の姿を証言する活動に心うたれました。イラクで市民を無差別に殺害したこと、そういう立場に追い込まれた体験を懸命に伝えようとする姿には涙がでました。そして、反戦イラク帰還兵の会を設立し、「アメリカよ目を覚ませ」「我々は米軍のイラクからの無条件撤退を要求する今すぐに」「血も油も、もうたくさんだ」と活動する姿には勇気と希望のようなものをもらった気がします。

田保寿一さんの話では、彼等はミニ証言集会を活発に行っていること、2009年3月19日にはドイツで証言集会をもったこと、同3月13～14日には交戦中のイラクで行われた「第一回国際労働者大会」に2名の代表派遣をしたことなどが紹介されました。証言をした2名の代表者は、壇上に駆け上がってきた（反米の）大会代議員の1人に抱きしめられ、満場の拍手に包まれ、2名の代表者は大会の最後に「もう私達は敵ではない、この地を再び緑の地とするため共にすすみたい」と挨拶したということです。

そのような中で、彼等の確固たる信念と、活発な活動を支えている、彼等の「愛国心」ってなんなんだろうということが、再び気になって仕方なくなりました。私は「冬の兵士」に感動し、「愛国心」が彼等を支えていると感じていましたが、さらに「愛国心」の意味を知ったことでそのことに目をつむることが出来なくなったのです。そして、文献などを当たっている内に次の文章に出会いました。それは、「真の愛国心は「人類愛の部分的な現れ」なのである」というロシアの思想家の言葉です。

「・・・だからこそ真の愛国者は、自分の民族を自慢し、褒めちぎるような絶叫を我慢できないのであり・・・人類愛の部分的な現れである真の愛国心は、個々の民族に対する敵意とは共存できない。」つまり、偏狭な愛国心は、物心ついた子どもが自分こそが世界

の中心だと思うように自分の国こそが世界で一番だと思っているが、真の愛国心とは、世界に視野を広げて他国の良さを理解することで自国を顧み、他国へも敬意をはらうようになる、というものでした。

この一節を読み終えて、“真の「愛国心」”と“エセ「愛国心」”の違いや、それが対立し、相容れないものであることを私なりに少しだけ理解できたような気持ちになりました。そして、「冬の兵士」の言う「私は国を愛している。みなさんも愛しているでしょう。私達は国を愛している。戦争を止めよう、今すぐに」「証言者はみんな、国を愛する愛国者です、ウィンターソルジャーに來た市民もみんな国を愛しています。アメリカ精神である人間らしい国を作ること、それを、私達は目指しているのです。」という言葉、そのままに受け入れられる気がしてきました。



そして、「私は、国旗を逆さまにしている。なぜなら米国は今、国難に遭遇しているからだ、しかし、我々は、まだアメリカを愛している」という立場に共感を感じます。私も、「日の丸や愛国心の押し付けに抗し、この国のありようをめくって活動を続けたい。なぜなら、この国を愛しているから」といえたらいいなと思います。今、“いいなと思う”だけなのは、日本では「国家主義」「愛国主義」の呪縛が強くてむずかしいなと思うからです。現在日本における「愛国心」が民族排外主義の同義として使われている一方で、米国ではイギリスに対する植民地戦争を闘う中で形成された概念であるという点は根本的に異なると思います。また、米国の先住民や移民の人たちが、コケシュのように「アメリカを愛している」と言えるのかはわかりません。具体的にもっと掘り下げて問題にする必要があると思います。

証言した帰還兵たちは、人類愛的な意味で愛国心を理解しているのだらうと思います。戦場での過酷な経験を通して、「イラクの人たちも我々と同じ人間じゃないか」「我々がアメリカを愛しているように、彼らもイラクを愛しているんだ」と思ったのではないかと思います。イラク人を蔑視して「ハッジ」「テロリスト」などと呼び洗脳された兵士達が戦地でイラクの人たちに遭遇し、全く自分たちと同じ人間であること、家族を大切に、生まれた家を愛し郷土を誇りにしている人たちなんだということを知るようになったのではないかと思います。それは、アダム・コケシュの「もし自分が17歳でイラク人だったら、占領軍を自分の国から追い払うため武器を手にとらないかもしれないが、自分のとるべき立場はわかる」という言葉につながるのではないかと思います。国旗を逆さまにして闘う「冬の兵士」を支える「愛国心」について、私達の住む「この国のありよう」についていろいろな人の考えをきいてみたいです。

2009年6月2日

リブ・イン・ピース 9 + 25 A . H .

上映会資料

シリーズ『冬の兵士 良心の告発』を観る

カンパ 100 円 2009.6.21.発行

発行：リブ・イン・ピース 9 + 2 5

TEL 090-5094-9483 (事務局 大阪)

E-mail [info@liveinpeace925.com](mailto:info@liveinpeace925.com)

<http://www.liveinpeace925.com/>